

# 旅なかま

REJSEKAMMERATEN

ハンス・クリスティアン・アンデルセン Hans Christian Andersen

青空文庫



かわいいそうなヨハネスは、おとうさんがひどくわずらって、きょうあすも知れないほどでしたから、もうかなしみのなかにしずみきっていました。せまいへやのなかには、ふたりのほかに人もいません。テーブルの上のランプは、いまにも消えそうにまばたきしていて、よるももうだいぶふけていました。

「ヨハネスや、おまえはいいむすこだった。」と、病人のおとうさんはいいました。「だから、世の中へでも、神さまがきつと、なにかをよくしてくださいよ。」

そういつて、やさしい目でじつとみながら、ふかいため息をひとつつくと、それなり息をひきとりました。それはまるでねむつ

ているようでした。でも、ヨハンネスは泣かずにいられません、この子はもう、この世の中に、父親もなければ、母親もないし、男のきょうだいも、女のきょうだいもないのです。かわいそうなヨハンネス。ヨハンネスは、寝台のまえにひざをついて、死んだおとうさんの手にほおずりして、しよっぱい涙をとめどなくながしていました。そのうち、いつか目がくつついて、寝台のかたい脚にあたまをおしつけたなり、ぐっすり寝こんでしまいました。

寝ているうちに、ヨハンネスは、ふしぎな夢をみました。お日さまとお月さまがおりて来て\*礼拝をるところをみました。それから、なくなつたおとうさんが、またげんきで、たっしやで、いつもほんとうにうれしいときするようならい声をきかせまし



た。ながい、うつくしい髪の毛の上に、金のかんむりをかぶったうつくしいむすめが、ヨハンネスに手をさしのべました。するとおとうさんが「ごらん、なんといいおよめさんをおまえはもらったのだろう。これこそ世界じゅうふたりとないうつくしいひとだ。」といいました。おや、とおもうとたん、ヨハンネスは目がさめました。うつくしい夢はかげもかたちもなく、おとうさんは死んで、つめたくなって、寝台にねていました。たれひとりそこにはいません。なんてかわいそうなヨハンネス。

\*ヨセフまたひとつ夢をみてこれをその兄弟に述べて  
いいけるは我また夢をみたるに日と月と十一の星われ  
を拜せりと。(創世記三七ノ九)

次の週に、死人はお墓の下にうまりました。ヨハンネスはぴつたり棺かんにつきそって行きました。これなりもう、あれほどやさしくしてくださったおとうさんの顔をみることはできなくなるのです。棺の上にはばらばら土のかたまりの落ちていく音を、ヨハンネスはききました。いよいよおしまい、棺の片はしがちらつとみえました。そのせつな、ひとすくい土がかかると、それもふさがってしまいました。みているうち、いまにも胸がちぎれそうに、かなしみがこみあげて来ました。まわりでうたうさんび歌がいかにもうつくしくきこえました。きくうちヨハンネスは、目のなかに涙がわきだして来ました。で、泣きたいだけ泣くと、かえって心持がはつきりして来ました。お日さまが、みどりぶかい木立こたちの

上に晴ればれとかがやいて、それは「ヨハンネス、そんなにかなしんでばかりいることはないよ。まあ、青青とうつくしい空をござらん。おまえのとうさんも、あの高い所にいて、どうかこのさきおまえがいつもしあわせでいられるよう、神さまにおねがいでいるところなのだよ。」と、いつているようでした。「ああ、ほく、あくまでいい人になろう。」と、ヨハンネスはいいました。

「そうすれば、また天国でとうさんにあうことになるし、あえたら、どんなにたのしいことだろう。そのときは、どんなにたくさん、話すことがあるだろう、そうして、おとうさんから、ずいぶんいろいろのことをおしえてもらえるだろう。天国のりっぱな所もたくさんみせてもらえるだろう。それは生きているとき、



地の上の話を、たんとおとうさんはしてくださったものだった。ああ、それはどんなにたのしいことになるだろうな。」

ヨハンネスは、こうはつきりとじぶんにむかっていってみて、ついほほえましくなりました。そのそばから、涙はまたほほをつたわってながれました。あたまの上で小鳥たちが、とちの木この木の立だちのなかから、ぴいちくち、ぴいちくちさえずっていました。小鳥たちはおとむらいに来ていながら、こんなにたのしそうにしているのは、この死んだ人が、いまではたかい天国にのぼっていて、じぶんたちのよりもつとうつくしい、もつと大きいつばさがあることや、この世で心がけのよかったおかげで、あちらへいっても、神さまのおめぐみをうけて、いまではしあわせにくら

していることをよく知っているからでした。この小鳥たちが、緑ぶかい木立をはなれて、とおくの世界へとび立っていくところを、ヨハンネスはみおくつて、じぶんもいつしよにとんでいきたくありませんでした。

けれども、さしあたりまず、大きな木の十字架かを切つて、それをおとうさんのお墓に立てなければなりません。さて、夕がた、それをもつていきますと、どうでしょう、お墓にはまあるく砂が盛つてあつて、きれいな花でかざられています。それはよその知らない人がしてくれたのです。なくなつたおとうさんはいい人でしたから、ひとにもずいぶん好かれていました。

さて、あくる日朝はやく、ヨハンネスは、わずかなものを包に

まとめ、のこった財産の五十ターレルと二、三枚のシリリング銀貨とを、すっかり腰につけました。これだけであてもなしに世の中へ出て行こうというのです。いよいよ出かけるまえ、まず墓地へいって、おとうさんのお墓におまいりして、主のお祈しゆをとなえてから、こういいました。

「おとうさん、さよなら。ぼくは、いつまでもいい人間でいたいとおもいます。ですから、神さまが、幸福にしてくださいように、たのんでください。」

ヨハンネスがこれからでいこうという野には、のこらずの花があたたかなお日さまの光をあびて、いきいきと、美しい色に咲いていました。そうして、風のふくままに、それが、がってんが

ってんしていました。「みどりの国へよくいらつしやいましたね、ここはずいぶんきれいでしよう。」といているようでした。けれど、ヨハンネスは、もういちどふりかえって、ふるいお寺におなごりをおしみました。このお寺で、ヨハンネスはこどものとき洗礼をうけました。日曜日にはきまつて、おとうさんにつれられていって、おつとめをしたり、さんび歌をうたつたりしました。そのとき、ふと、たかい塔の窓の所に、お寺の\*小魔こおにが、あかいとんがり頭巾をかぶつて立っているのがみえました。小魔は目のなかに日がさしこむので、ひじをまげてひたいにかざしているところでした。ヨハンネスはかるくあたまをさげて、さよならのかわりにしました、小魔は赤い頭巾をふったり胸に手をあてたり、

いくどもいくども、\*\*投げキッスしてみせました。それは、ヨハンネスのためにかずかず幸福のあるように、とりわけ、たのしい旅のつづくようにいのつてくれる、まごころのこもったものでした。

いえおに  
\*家魔。善魔こびとで矮魔こびとの一種。ニース (Nis)。人間の

家のなかに住み、こどもの姿で顔は老人。ねずみ色の服に赤い先の尖った帽子をかぶる。お寺にはこの仲間が必ずひとりずついて塔の上に住み、鐘をたたいたりするという。

\*\*じぶんの手にせつぷんしてみせて、はなれている相手にむかってその手をなげる形。

ヨハンネスは、これから、大きなにぎやかな世間へでたら、どんなにたくさん、おもしろいことがみられるだろうとおもいました。それで、足にまかせて、どこまでも、これまでついぞ来たこともない遠くまで、ずんずんあるいて行きました。通つていく所の名も知りません。出あうひとの顔も知りません。まったくよその土地に来てしまっていました。

はじめの晩は、野ツ原の、枯草を積んだ上にねなければなりませんでした。ほかに寝床といつてはなかつたのです。でも、それがとても寝ごこちがよくて、王さまだつてこれほどけっこうな寝床にはお休みにはなるまいとおもいました。ひろい野中に小川がちよろちよろながれていて、枯草の山があつて、あたまの上

は青空がひろがっていて、なるほどりっぱな寝べやにちがいありません。赤い花、白い花があいだにてんてん点点と咲いているみどりの草原は、じゆうたんの敷物でした。にわとこのくさむらとのばらの垣が、おへやの花たばでした。洗面所のかわりには、小川が水すいしよう

晶いしろうのようなきれいな水をながしてくれましたし、そこにはあしがこつくり、おじぎしながら、おやすみ、おはようをいってくれました。お月さまは、おそろしく大きなランプを、たかい青天てんんじよう

井いの上で、かんかんともしてくださいましたが、この火がカーテンにもえつく気づかいはありません。これならヨハンネスもすつかり安心してねられます。それでぐつつすり寝こんで、やっと目をさますと、お日さまはもうとうにのぼって、小鳥たちが、ま

わりで声をそろえてうたっていました。

「おはよう。おはよう。まだ起きないの。」

お寺では、かんかん、鐘がなっていました。ちようど日曜日でした。近所のひとたちが、お説教をききに、ぞろぞろでかけていきます。ヨハンネスも、そのあとからついて行って、さんび歌のなかまにまじって、神さまのお言葉をききました。するうち、こどものとき、洗礼をうけたり、おとうさんにつれられて、さんび歌をいっしょにうたった、おなじみぶかいお寺に来ているようにおもいました。

お寺のそとの墓地には、たくさんお墓がならんでいて、なかには高い草のなかにうずまっっているものもありました。それをみる



と、ヨハンネスは、おとうさんのお墓も草むしりして、お花をあげるものがなければ、やがてこんなふうになるのだとおもいました。そこで、べつたりすわって、草をぬいてやったり、よろけている十字架かをまつすぐにしてやったり、風でふきとんでいる花環はなわをもとのお墓の所へおいてやったりしました。そんなことをしながら、ヨハンネスはかんがえました。

「たぶん、おとうさんのお墓にも、たれかが、おなじことをしておいてくれるでしょう、ぼくにできないかわりに。」

墓地の門そとに、ひとり、年よりのこじきがいて、よぼよぼ、松葉づえにすがっていました。ヨハンネスは、もっていたシリング銀貨をやってしまいました。それですっかりたのしくなり、げ

んきになって、またひろい世の中へでていきました。

夕方、たいへんいやなお天気になりました。どこか宿をさがさうとおもっていそぐうち、夜になりました。でもどうやら、小山の上にぼつり立っているちいさなお寺にたどりつきました。しあわせと、おもての戸があいていたので、そつとそこからはいりました。そうして、あらしのやむまでそこにいることにしました。「どこかすみっこにかけさせてもらおう。」と、ヨハンネスはいつて、なかにはいつていきました。

「なにしろひどくくたびれている、すこし休まずにはいられない。」

こういつて、ヨハンネスはそこにどたんすわつて、両手をく

みあわせて、晩のお祈をいしました。こうして、いつか知らないまに寝込んで、夢をみていました。そのあいだに、そとでは、かみなりがなったり、いなづまが走ったりしていました。

やっと目がさめてみると、もう真夜中<sup>まよなか</sup>で、あらしはとうにやんで、お月さまが、窓からかんかん、ヨハンネスのねている所までさし込んでいました。ふとみると、本堂のまんなかに、死んだ人を入れた棺<sup>かん</sup>が、ふたをあけたまま置いてありました。まだお葬式がすんでいなかっただのです。ヨハンネスは正しい心の子でしたから、ちつとも死人をこわいとはおもいません。それに死人がなにもわるいことをするはずのないことはよくわかっていました。生きているわるいひとたちこそよくないことをするのです。ところ

へ、ちようど、そういう生きているわるい人間のなかまがふたり、死人のすぐわきに来て立ちました。この死人はまだ埋まい葬そうがすまないのです、お寺にあずけておいてあつたのです。それをそつと棺のなかに休ませておこうとはしらずに、お寺のそとへほうりだしてやろうという、よくないたくらみをしに来たのです。死んだ人を、きのどくなことですよ。

「なんだって、そんなことをするのです。」と、ヨハンネスは声をかけました。「ひどい、わるいことです。エスさまのお名にかけて、どうぞそつとしてあげておいてください。」

「くそ、よけいなことをいうない。」と、そのふたりの男はこわい顔をしました。「こいつはおれたちをいっぱいはめたんだ。お

れたちから金を借りて、かえさないまま、こんどはおまけにおツ死んでしまやがったんだ。おかげで、おれたちの手には、びた一文かえりやしない。だからかたきをとってやるのだ。寺のそとへ、犬ツころのようにほうりだしてやるのだ。」

「ぼく、五十ターレル、お金があります。」と、ヨハンネスはいました、「これがもらったありったけの財産ですが、そっくりあなた方に上げましょう。そのかわり、けっしてそのかわいそうな死人のひとをいじめないと、はっきり約束してください。なあに、お金なんかなくつてもかまわない。ぼくは手足はたっしやでつよい、それにしじゅう神さまが守っていてくださるとおもうから。」

「そうか。」と、そのにくらしい男どもはいいました。「きさま、ほんとうにその金かねをはらうなら、おれたちもけつして手だしはしないさ、安心していいが。」

こういつて、ふたりは、ヨハンネスのだしたお金をうけとつて、この子のお人よしなのを大わらいにわらつたのち、どこかへ出て行きました。でも、ヨハンネスは死人を、またちやんと棺かんのなかへおさめてやつて、両手を組ませてやりました。さて、さよならをいうと、こんどもすつかりあかるい、いい心持になつて、大きな森のなかへはいつていきました。

森のなかをあるきながらみまわすと、月あかりが木立をすけてちらちらしているなかに、かわいらしい妖ようじよ女たちのおもしろそ

うにあそんでいるのが目にはいりました。妖女たちはへいきでいました。それは、いま方はいって来たヨハンネスが、やさしい、いい人間だということをよく知っているからでした。わるい人間だけには、妖女のすがたがみたくとも見えないのです。まあ、かわいらしいといって、ほんとうに、指だけのせいもない妖女もいました。それぞれながい金いろの髪の毛を、金のくしですいていました。ふたりずつ組になって、木の葉や、たかい草の上にむすんだ大きな露の玉の上でぎったんばったんしていました。ときどきこの露の玉がころがりだすと、のっているふたりもいっしょにころげて、ながい草のじくのあいだでとまります。すると、ほかのちいさいなかまに、わらい声とときの声がおこりました。そ

れはずいぶんおもしろいことでした、そのうち、みんな歌をうた  
いだけしましたが、きいているうち、ヨハンネスは、こどものじぶ  
んおぼえた歌を、はつきりおもいだしました。銀のかんむりをあ  
たまにのせた大きなまだらぐもが、こちらの垣からむこうの垣へ、  
ながいつり橋や御殿を網で張りわたすことになりました。さて、  
そのうえにきれいな露がおちると、あかるいお月さまの光のなか  
でガラスのようにきらきらしました。こんなことがそれからそれ  
とつづいているうち、お日さまがおのぼりになりました。すると、  
妖女たちは、花のつぼみのなかにはい込みました。朝の風が、つ  
り橋やお城をつかむと、それなり大きくもの網になって、空の  
上にとびました。



さて、ヨハンネスがいよいよ森を出ぬけようとしたとき、しつかりした男の声で、うしろからよびとめるものがありました。

「もしもし、ご同行、どうぎようどこまで旅をしなさる。」

「あてもなくひろい世間へ。」と、ヨハンネスはいいました。

「父親もなし、母親もなし、たよりのないわかものです。でも神さまは、きつと守ってくださいるでしょう。」

「わたしも、あてもなく世間へでいくところだ。」と、その知らないひとはいいました。「ひとつ、ふたりでなかまになりましたようか。」

「ええ、そうしましょう。」と、ヨハンネスもいいました。そこで、ふたりは、いっしょに出かけました。じき、ふたりは仲よし

になりました。なぜといって、ふたりともいい人たちだったからです。ただ、ヨハンネスは、この知らない道づれが、じぶんよりもはるかはるかかしこい人だということに、気がつきました。この人は世界じゅうたいいていあるいていて、なんだって話せないこととはなくらいでした。

お日さまが、もうすいぶんたかくのぼったので、ふたりは大きな木の下に腰をおろして、朝の食事にかかりました。そこへ、ひとりのおばあさんがあるいて来ました。いやはや、ずいぶんなおばあさん、まるではうように腰をまげてあるいて、やつとしゅもくづえにすがっていました。それでも、森でひろいあつめたたきぎをひとたば、せなかにのせていました。前掛が胸でからげて

あつて、ヨハンネスがふとみると\*しだの木のじくにやなぎの枝をはめた大きいむちが三本、そこからとびだしていました。で、ふたりのいるまえをよろよろするうち、片足すべらしてころぶとたん、きやあとたかい声をたてました。きのどくに、このおばあさん、足をくじいたのですね。

\*しだの木は魔法の木。しだの木のむちに、やなぎの枝の柄をはめる。

ヨハンネスはそのとき、ふたりでおばあさんをかかえて、住居すまいまでおくつて行ってやろうといいました。道づれの知らない人は、はいのうをあけて、小箱をだして、いや、このなかにこうやくがはいっている、これをつければ、すぐと足のきずがなおって、も

とどおりになるから、ひとりでうちへかえれて、足をくじいたことなぞないようになると思いました。そして、そのかわりに、といつても、なあに、その前掛にくるんでいる三本のむちをもらうだけでいいのだがね、といいました。

「とんだ高い薬やく代だいだの。」と、おばあさんはいつて、なぜかみように、あたまをふりました。

それで、なかなか、このむちを手ばなしたがらないようすでしたが、くじいた足のままそこにたおれていることも、ずいぶんらくではないので、とうとう、むちをゆずることになりました。そのかわり、ほんのちよつぴりくすりをなすつたばかりで、このおばあさん、すぐぴんと足が立って、まえよりもたつしやに、しや

んしやんあるいていきました。これはまさしく、このこうやくのききめでした。でも、それだけに、薬屋などでめつたに手にはいるものではありません。

「そんなむちみたいなもの、なんにするんです。」と、ヨハンネスは、そこで旅なかまにたずねました。

「どうして、三本ともけつこうな草ぼうきさ。」と、相手はいいました。「こんなものをほしがるのは、わたしもとんだかわりも  
のさね。」

さて、それからまた、しばらくの道のりを行きました。

「やあ、いけない、空がくもつて来ますよ。」と、ヨハンネスはいいました。「ほら、むくむく、きみのわるい雲がでて来ました

よ。」

「いんや。」と、旅なかまはいいました。「あれは雲ではない。山さ。どうしてりっぱな大山さ。のぼると雲よりもたかくなつて、澄んだ空気のかなかに立つことになる。そこへいくと、どんなにすばらしいか。あしたは、もうずいぶんとおい世界に行っていることになるよ。」

でも、そこまでは、こちらでながめたほど近くはありませんでした。まる一日たっぷりあるいて、やっと山のふもとにつきましました。見あげると、まっくろな森が空にむかつてつつ立っていて、町ほどもありそんな大きな岩がならんでいました。それへのぼろうというのは、どうしてひととおりやふたとおり骨の折れるしご

とではなさそうです。そこで、ヨハンネスと旅なかまは、ひと晩ふもとの宿屋にとまって、ゆつくり休んで、あしたの山のぼりのげんきをやしなうことにしました。

さて、その宿屋の下のへやの、大きな酒場さかばには、おおぜい人があつまっていました。人形芝居をもつて旅まわりしている男が来て、ちようどそこへ小さい舞台をしかけたところでした。みんなはそれをとりまいて、幕のあくのを待つさいちゆうでした。ところで、いちばんまえの席は、ふとつた肉屋のおやじが、ひとりでせんりようしていましたが、それがまた最上の席でもあったでしょう。しかも大きなブルドッグが、それがまあなんとにくらいしい、くいつきそうな顔をしていたでしょう。そやつが主人のわきに座

をかまえて、いっぱし人間なみに、大きな目をひからしていました。

そのうち、芝居がはじまりましたが、それは王さまと女王さまの出てくる、なかなかおもしろい喜劇でした。ふたりの陛下は、びろうどの玉座に腰をかけて、どうしてなかなかの衣裳いしやうもちでしたから、金のかんむりをかぶって、ながいすそを着物のうしろにひいていました。ガラスの目玉をはめて、大きなうわひげをはやした、それはかわいらしいでくのぼうが、どの戸口にも立っていて、しめたり、あけたり、おへやのなかにすずしい風のはいるようにしていました。どうもなかなかおもしろい喜劇で、いい気ばらしになりました。そのうち、人形の女王さまは立ち上がって、



ゆかの上をそろそろあるきだしました。そのときまあ、れいのブルドッグが、いったい、なんとおもったのでしようか、それをまた主人がおさえもしなかつたものですから、いきなり、舞台にとびだして来て、おやというまもなく、女王さまのかぼそい腰をぱつくりかみました。とたん、「がりツがりツ」という音がきこえました。いやはや、おそろしいことでした。

かわいそうに、人形つかいの男はすっかりしよげて、女王さまの人形をかかえて、おろおろしていました。それは一座のなかでも、いちばんきりようよしの人形でしたのに、にくにくしいブルドッグのために、あたまをかみきられてしまったのですからね。けれども、みんな見物が散ってしまったあと、ヨハンネスといっ

しよにみに来ていた旅なかまが、こんども、そのきずをなおしてやろうといいだしました。そこで、れいの小箱をあけて、おばあさんのくじいた足を立たせてやったあのこうやくを、人形にぬつてやりました。人形は、こうやくをぬつてもらうと、さつそくきずがきれいになおつて、おまけに、じぶんで手足までたつしやにうごかせるようになりました。もう糸であやつることもいらなくなりしました。人形はまるで、生きた人のようでした。ただ口がきけないだけです。人形芝居の親方は、どんなによるこんだでしょう。人形つかいがかわなくても、この人形は勝手にじぶんでおどれるのです。これは、ほかの人形にまねのならないことでした。

よなか  
夜中になつて、宿屋にいた人たちがのこらず寝しずまろうとい

うとき、どこかでしくしくすすり泣く声が出て、いつまでもやまないものですから、みんな気にして起きあがって、いったい、たれが泣いているのか見ようと思いました。それがどうも人形芝居の舞台のほうらしいので、親方がすぐ行ってみますと、でくのぼうは、王さまはじめのこらずの近衛兵このえへいがかさなりあつて、そこころがつていました。いまし方かなしそうにしくしくやつていたのは、このガラス目だまをきよとんとさせている人形なかまであつたのです。それは、女王さまとおなじように、ちよつぴり、こうやくをぬってもらつて、じぶんで勝手にうごけるようになりたいたいというのです。すると、女王さまもそばで、べつたりひぎをついて、そのりっぱな金かんむりをたかくささげながら「どうぞ、

わたくしからこのかんむりをおとりあげください、そのかわり、夫にも、家来たちにも、どうぞお薬をぬっていただけますように。」といのりました。そうきいて、この人形芝居の親方は、きどくに、人形たちが、ふびんでふびんでついっしょに泣きだしました。親方はそこで、旅なかまにたのんで、あすの晩の興こうぎよ行うのあがりのをのこらずさしあげます。どうぞ、せめて四つでも五つでも、なかできりようよしな人形にだけでも、こうやくを塗つてやつてはもらえますまいかと、くれぐれたのみました。ところで、旅なかまは、ほかのものは一切いっさいいらぬ、わたしのほしいのは、そのおまえさんの腰につるしている劔だけだといいました。そうして、劔を手に入れると、六つの人形のこらずにこうや

くをぬってやりました。すると人形たちは、さつそくおどりだしました。しかもその踊のうまいこと、そこにみていたむすめたちが、生きている人間のむすめたちのこらすが、すぐといっしよにおどりださずにはいられないくらいでした。するうち、御者と料理番のむすめも、つながっておどりだしました。給仕人もへや女中も、おどりだしました。お客たちも、いっしよにおどりだしました。とうとう十じゅうのう能と火ばしまでが、組になっておどりだしました。でも、このひと組は、はじめひとはねはねると、すぐところんでしまいました。いやもう、ひと晩じゆう、にぎやかで、たのしかつたことといつたら。

つぎの朝、ヨハンネスは旅なかまとつれ立って、みんなからわ

かれて行きました。高い山にかかつて、大きなもみの林を通つて  
いきました。山道をずんずんのぼるうちに、いつかお寺の塔が、  
ずっと目のしたになつて、おしまいにはそれが、いちめんみどり  
のなかにぼつつりとただひとつ、赤いいちごの実をおいたように  
みえました。もうなん里もなん里もさきの、ついいったことな  
い遠方までがみはらせました。——このすばらしい世界に、こん  
なにもいろいろとうつくしいものを、いちどに見るなんというこ  
とを、ヨハンネスは、これまでに知りませんでした。お日さまは、  
さわやかに晴れた青空の上からあたたかく照りかがやいて、峰と  
峰とのあいだから、りょうしの吹く角<sup>つのぶえ</sup>笛が、いかにもおもしろ  
く、たのしくきこえました。きいているうちにもう、うれし涙が

目のなかにあふれだしてくると、ヨハンネスは、おもわずさげばずにはいられませんでした。

「おお、ありがたい神さま、こんないことをわたしたちにしてくださって、この世界にあるかぎりのすばらしいものを、惜しまずみせてくださいますあなたに、まごころのせつぶんをささげさせてください。」

旅なかまも、やはり、手を組んだまま、そこに立って、あたたかなお日さまの光をあびているふもとの森や町をながめました。ちようどそのときふと、あたまの上で、なんともめずらしく、かわいらしい声がありました。ふたりがあおむいてみると、大きいまっ白なはくちようが一羽、空の上に舞っていました。そのうたう

声はいかにもうつくしくて、ほかの鳥のうたうのとまるでちがっていました。でも、その歌が、だんだんによわつて来たとき、鳥はがっくりうなだれました。そうして、それは、ごくものしずかに、ふたりの足もとに落ちて来ました。このうつくしい鳥は死んで、そこに横たわっているのです。

「こりやあ、そろつてみごとなつばさだ。」と、旅なかまはいいました。「どうだ、このまつ白で大きいこと、この鳥のつばさぐらいになると、ずいぶんの金<sup>かね</sup>高<sup>たか</sup>だ、これは、わたしがもらつておこう。みたまえ、劔をもらつて来て、いいことをしたろうがね。」

こういつて、旅なかまは、ただひとうち、死んだはくちようの



つばさを切りおとして、それをじぶんのものにしました。

さて、ふたりは山を越えて、またむこうへなん里もなん里も旅をつづけていくうちに、とうとう、大きな町のみえる所に来ました。その町にはなん百とない塔がならんで、お日さまの光のなかで、銀のようにきらきらしていました。町のまんなかには、りっぱな大理石のお城があつて、赤い金で屋根が葺ふけていました。これが王さまのお住居すまいでした。

ヨハンネスと旅なかまとは、すぐ町にはいろいろとはしないで、町の入口で宿をとりました。ここで旅のあかをおとしておいて、さっぱりしたようすになつて、町の往来をあるこうとこののです。宿屋のていしゆの話では、王さまという人は、心のやさしい、そ

れはいいひとで、ついぞ人民に非道ひどうをはたらいたことはありません。ところがその王さまのむすめというのが、やれやれ、なさないことにひどいわるもののお姫さまだということです。きりようがすばらしくよくて、世にはこんなにもしとやかな人があるものかとおもうほどですが、それがなんになるでしょう、このお姫さまがいけない魔法つかいで、もうそのおかげで、なんとなくなりっぱな王子が、いのちをなくしました。——それはたれでもお姫さまに結婚を申しこむおゆるしが出ていて、それは王子であろうとこじきであろうと、たれでもかまわない、というのですが、そのかわり、お姫さまのおもっている三つのことをたずねられたら、それをそっくりあてなければならぬのです。そのかわり、あた

ればお姫さまをおよめにして、おとうさまの王さまのおかくれになったあとでは、けっこうこの国の王さまにもなれる。けれどもその三つともあたらなければ、首をしめられるか、切られるかなければなりません。このうつくしいお姫さまが、こんなにもひどい、わるものなのでした。おとうさまの老王さまも、そのことでは、ずいぶんつらがつておいでなのですが、そんなむごたらしいことをするなととめるわけにいかないというのは、いつかお姫さまのむこえらみについては、けっして口だししないといひだされたため、お姫さまはなんでもじぶんのしたいままにしてよいことになっているからです。それで、あとから、あとから、ほうぼうの国の王子が代る代るやつて来て、なぞをときそこなつては、

首をしめられたり、切られたりしました。そのくせ、まえもっていいきかされていることですから、なにも申込をしなければいいのですが、やはりお姫さまをおよめにたれもしたがりました。お年よりの王さまは、かさねがさねこういふかなしい不幸なことのおこるのを、心ぐるしくおもつて、年に一日、日をきめて、のこらずの兵隊をあつめて、ともども神さまのまえにひれ伏して、どうか王女が善心にかえるようにとせつないおいのりをなさるのですが、をなさるのですが、お姫さまはどうしてもそれをあらためようとはしないのです。この町で年よりの女たちが、ブランデーをのむにも、黒くしてのむのは、それほどかなしがっている心のしようこをみせるつもりでしょう。まあ、そんなことよりほかに

しようがないのですよ。

「いやな王女だなあ。」と、ヨハンネスはいいました。「そんなのこそ、ほんとうにむちでもくらわしたら、ちつとはよくなるかもしれない。わたしがそのお年よりの王さまだったら、とうにひどくこらしめてやるところなのに。」

そのとき、そとで、町の人たちが、万歳万歳とさけぶ声がしました。ちようど王女のお通りなのです。なるほど、王女はじつに目のさめるようなうつくしきで、このお姫さまがわるい人間だということをおすれさせるほどでしたから、ついたられも万歳をさけずにはいられなかったのです。十二人のきれいな少女がおそろいの白絹の服で、手に手に金のチューリップをささげてもち、ま

つ黒な馬にのつて、両わきにしたがいました。王女ご自身は、雪とみまがうような白馬はくばに、ダイヤモンドとルビイのかざりをつけてのつていました。お召の乗馬服は、純金の糸を織ったものでした、手にもったむちは、お日さまの光のようにきらきらしました。あたまにのせた金のかんむりは、大空のちいさな星をちりばめたようですし、そのマントはなん千とないちよちようのはねをあつめて、縫いあわせたものでした。そのくせ、そんなにしてかざり立てたのこらずの衣いしやう裳も、王女みずからのうつくしきにはおよびませんでした。

ヨハンネスは、王女をみたせつな、顔いちめんかつと赤くほつて、ただひとしづくの血のしたたりのようになりました。もう

ひと言もものがいえなくなりました。まあ、この王女は、おとうさんのなくなつた晩、ヨハンネスが夢でみた、あの金のかんむりのうつくしいむすめにそっくりなのです。あんまりうつくしいので、いやおうなしに、いきなり大好きにさせられてしまいました。この人が、じぶんのかけたなぞが、そのとおりにとけないといつて、ひとの首をしめたり、きらせたりするわるい魔法つかいの女だなんて、そんなはずがあるものか。「たれでも、それは、この上ないみじめなこじきでも、お姫さまに結婚を申し込むことはかまわないということだ。よし、ぼくもお城へでかけよう。

「どうしたつていかずにはいられないもの。」

ところでみんなは、口をそろえて、そんなまねはしないがいい、

ほかのものと同様、うきめをみるにきまつているといいました。

旅なかまも、やはり、おもいとまるようにいきかせました。

でも、ヨハンネスは、大じょうぶ、うまくやってみせますといって、くつと上着のちりをはらって、顔と手足をあらって、みごとな金髪きんぱつにくしを入れました。それからひとり町へでていって、お城の門まで来ました。

「おはいり。」ヨハンネスが戸をたたくと、なかで、お年よりの王さまがおこたえになりました。——ヨハンネスがあけてはいると、ゆつたりした朝着のすがたに、縫いとりした上ぐつをはいた王さまが、出ておいでになりました。王冠をあたまにのせて、王しやくを片手にもって、王さまのしるしの地球儀の珠たまを、もうひ



とつの手にのせていました。

「ちよつとお待ちよ。」と、王さまはいつて、ヨハンネスに手をおだしになるために、珠を小わきにおかかえになりました。ところが、結婚申込に來た客だとわかると、王さまはさつそく泣きだして、しやくも珠も、ゆかの上どころがしたなり、朝着のそで、涙をおふきになるしまつでした。おきのどくな老王さま。

「それは、およし。」と、王さまはおつしやいました。「ほかのもの同様、いいことはないよ。では、おまえにみせるものがある。」

そこで、王さまは、ヨハンネスを、王女の遊園ゆうえんにつれていきました。なるほどすごい有様です。どの木にもどの木にも、三人、

四人と、よその国の王さまのむすこたちが、ころされてぶら下がっていました。王女に結婚を申し込んで、もちだしたなぞをいいあてることができなかつた人たちです。風がふくたんびに、死人の骨がからから鳴りました。それを、小鳥たちもこわがって、この遊園ゆうえんには寄りつきません。花という花は、人間の骨にいわいつけてありました。植木ばちには、人間のしやりツ骨が、うらめしそうに歯をむきだしていました。まったく、これが王さまのお姫さまの遊園とはうけとれない、ふうがわりのものでした。

「ほらね、このとおりだ。」お年よりの王さまは、おっしやいまして。「いずれおまえも、ここにならんでいる人たちとそっくりおなじ身の上になるのだから、これだけはどうかやめておくれ。」



わたしになさけないおもいをさせないでおくれ。わしは心ぐるしくてならないのだからな。」

ヨハンネスは、この心のいいお年よりの王さまのお手にせつぷんしました。そうして、わたくしはうつくしいお姫さまを心のそこからしたっています。きつと、うまくいくつもりですといいました。

そういつているとき、当のお姫さまが、侍女じじよたちのこらず引きつれて、馬にのったまま、お城の中庭へのり込んで来ました。そこで、王さまも、ヨハンネスもそこへいつてあいさつしました。お姫さまはそれこそあでやかに、ヨハンネスに手をさし出しました。それで、よけい好きになりました。世間の人たちがうわさす

るように、このひとがそんなわるい魔法つかいの女なぞであるわけがありません。それから、みんなそろって広間へあがると、かわいいお小姓こしやうたちが、くだもののお砂糖漬だの、くるみのこしよう入りのお菓子だのをだしました。でも、王さまはかなしくて、なんにもお口に入れるどころではなく、それに、くるみのこしよう入のお菓子はかたくて、お年よりには歯が立ちませんでした。

さて、ヨハンネスは、そのあくる日、またあらためてお城へくることになりました。そこに審判官しんぱんかんと評定官ひやうじやうかんのこらすがあつまつて、問答もんどうをきくことになっていました。はじめの日は、まく通れば、そのあくる日また来られます。でも、これまでは、もう最初の日からうまくいったためしがないのです。そうなれば、

いやでもいのちひとつふいにしなくてはなりません。

ヨハンネスは、いったいどうなるかなんものという心配はしません。ただもううきうきと、うつくしいお姫さまのことばかりかんがえていました。そうしておめぐみぶかい神さまが、きつとたすけてくださるとかたく信じていました。ではどういうふうにといても、それはわかりません。そんなことはかんがえないほうがいいとおもっていました。そこで、宿へかえる道道も、往來をおどりおどりとくると、旅なかまが待ちかまえていました。

ヨハンネスは、王女がやさしくもてなしてくれたこと、いかにもうつくしいひとだということ、それからそれととめどなく話しました。あしたはいよいよお城へかけて、みごとになぞをい

あてて、運だめしをするのだといって、もうそればかり待ちこがれていました。

けれども、旅なかまは、かぶりをふって、うかない顔をしていました。

「わたしは、とてもきみを好いているのだ。」と、旅なかまはいました。「だから、おたがいこれからもながくいつしよにいたいとおもうのに、これなりおわかれにならなくてはならない。ヨハンネス、きみはきのどくなひとだよ。わたしは泣きたくてならないが、こうしているのも今夜かぎりだろうから、せつかくのきみのたのしみをさまたげるでもない。愉快にしようよ。大いに愉快にね。泣くことなら、あす、きみのでいったあとで、存ぞ

んぶん  
分に泣けるからな。」

お姫さまのところへ、あたらしい結婚の申し込み手がやって来たことを、もうさつそく町じゆうの人たちが知っていました。それで、たれも大きなかなしみにおそわれました。芝居は木戸をしめたままです。お菓子屋さんたちは申しあわせたように、小ぶたのお砂糖人形を黒い、喪ものリボンで巻きました。王さまは、お寺で坊さんたちにまじって、神さまにお祈をささげました。どこもかしこもしめつぽいことでした。それはどうせ、ヨハンネスだけに、これまでのひとたちとちがったいい目が出ようとは、たれにもおもえなかつたからでした。

その夕方、旅なかまは、大きなはちにいつぱい、くだもののお



酒のポンスをこしらえて来て、それでは大いに愉快にやって、ひとつ王女殿下の健康をいわって乾杯かんぱいしようといいました。ところが、ヨハンネスは、コップに二はいのむと、もうすっかりねむくなって、目をあけていることができなくなり、そのままぐつすり寝込んでしまいました。旅なかまは、ヨハンネスをそつといすからだき上げて寢床に入れました。夜がふけて、そとはまつくらやみになりました。旅なかまは、れいのはくちようから切りとつた二枚の大きなつばさを、しっかりと、肩にいわいつけました。そうして、あのころんで足をくじいたおばあさんからもらった三本のむちのなかの、いちばんながいのをかくしにつつこむと、窓をあけて、町の丘から、お城のほうへ、ひらひらとんでいきまし

た。それから王女の寝べやの窓下に来て、そつと片すみにしのんでいました。

町はひっそりしていました。ちょうど時計は十二時十五分まえをうったところですよ。ふと窓があいたとおもうと、王女はながい白マントの上に、まっ黒なつばさをつけて、ひらりと舞い上がりました。町の空をつつきつて、むこうの大きな山のほうへとんでいきました。ところで、旅なかまは、王女に気づかれないようからだをみえなくしておいて、そのあとを追いながら、王女をむちでうちました。うたれるそばから、ひどく血がでました。ほほう、たいへんな空の旅があつたものですね。風が王女のマントを、それこそ大きな舟の帆のように、いっぱいにくくらませて行く上

から、ほんのりとお月さまの光がすけてみえました。

「おお、ひどいあられだ、ひどいあられだ。」

王女は、むちのあたるたんびにこういいました。なに、ぶたれるのはあたりまえです。それでもやつと山まで来て、とんとん戸をたたきましたとたん、ごろごろひどいかみなりの音がして、山はぱっくり口をあきました。王女はなかへはいました。旅なかまもつづいてはいりました。でも、姿がみえなくしてあるので、たれも気がつきません。ふたりがながい廊下ろうかをとおっていくと、両側の壁が奇妙にきらきら光りました。それは、なん千とない火ぐもが、壁の上をぐるぐるかけまわって、火花のように光るためでした。それから、金と銀でつくつてある大広間にはいました。

そこには、ひまわりぐらい大きい赤と青の花が、壁できらきらしていました。でもその花をつむことはできません。というのは、その花のじくがきみのわるい毒へびで、花というのも、その大きな口からはきだすほのおだからです。天てんじょう井には、いちめん、ほたるが光っているし、空いろのこうもりが、うすいつばさをばたばたさせていました。じつになんともいえないかわったありさまでした。ゆかのまん中に、王さまのすわるいすがひとつずつあつて、これを四頭の馬の骨が背中にのせていました。その馬具はまつ赤な火ぐもでした。さて、そのいすは、乳いろしたガラスで、座ぶとんというのも、ちいさな黒ねずみがかたまつて、しつぽをかみあつているものでした。いすの上に、ばらいろのく

もの巢でおった天蓋てんがいがつるしてあつて、それにとてもきれいなみどり色したかわいいはえが、宝石をちりばめたようにのつていました。ところで、王冠をかぶつて、王しやくをかまえて、にくらしい顔で、王さまのいすにじいさんの魔法つかいが、むんずと座をかまえていました。魔法つかいはそのとき、王女のひたいにせつぷんすると、すぐわきのりっぱないすにかけさせました。やがて音楽がはじまりました。大きな黒こおろぎが、ハーモニカをふいて、ふくろうが太鼓のかわりに、はねでおなかをたたきました。それは、とぼけた音楽でした。かわいらしい、豆粒のような小鬼どもは、ずきんに鬼火をつけて、広間のなかをおどりまわりました。こんなにみんないても、たれにも旅なかまの姿はみえま

せんでしたから、そつと王さまのいすのうしろに立つて、なにもかもみたりきいたりしました。さて、そこへひとかど、もったいらしく気どつて、魔法御殿のお役人や女官たちが、しやなりしやなり出て来ました。でも正しくものみえる目でみますと、すぐとばけの皮があらわれました。それはほうきの柄にキャベツのいしがん首をすげたばけもので、それが縫いとりした衣裳いしを着せてもらつて、魔法つかいの魔法で、息を吹き込んでもらつて、動いているだけでした。どのみち、こけおどかしにしていたことで、なにがどうだつてかまつたことはありません。

しばらくダンスがあつたあとで、王女は魔法つかいに、あたらしく、結婚の申し込み手の来たことを話しました。それで、あし

たの朝お城へやってくるが、相手をためすには、なにを心におもっていることにしようか、相談をかけました。

「よろしい、おききなさいよ。」と、魔法つかいはいいました。

「まあ、なんでもごくたやすいことをかんがえるのさ。すると、かえって、わからないものだ。そう、じぶんのくつのことでもかんがえるのだなあ。それならまずあたるまい。それで首をきらせてしまう。ところで、あすの晩くるとき、その男の目だまをもつてくることを、わすれないようにな。久しぶりでたべたいから。」

王女は、ていねいにあたまをさげて、目だまはわすれずにもつて来ますといいました。魔法つかいが山をあけてやりますと、王女はお城へとんでかえりました。でも、旅なかまはどこまでもあ

とについて行って、したたかむちでぶちました。王女は、あられがひどい、ひどいとこぼし、こぼし、一生けんめいにげて、やつと寝べやの窓から、なかへはいりました。旅なかまも、それなり宿のほうへとんでかえっていきますと、ヨハンネスは、まだねむったままでしたから、そつとつばさをぬいで、じぶんも床にはいりました。なにしろ、ずいぶんつかれていたでしようからね。

さて、あくる日まだくらいうちから、ヨハンネスは目をさましました。旅なかまもいっしょに起きて、じつにゆうべはふしぎで、お姫さまと、それからお姫さまのくつの夢をみたという話をして、だから、ためしに、お姫さま、あなたはごじぶんのくつことをおもって、それをきこうとなさるのでしようといつてごらん、とい



いました、これは、山で魔法つかいのいったことばを、そっくりきいていつているだけなのですが、そんなことはおくびにもださず、ただ、王女がじぶんのくつのことをかんがえていやしないか、きいてみよとだけいったのです。

「ぼくにしてみれば、なにをどうこたえるのもおなじです。」と、ヨハンネスはいいました。「たぶんあなたが夢でごらんになったとおりでしょう。それはいつだって、やさしい神さまが、守っていてくださるとおもって、安心していらのですからね。けれど、おわかれのごあいさつだけはしておきましょうよ。答をまちがえれば、もう、二どとおめにかかれないんですから。」

そこで、ふたりはせつぶんしあいました。やがて、ヨハンネス

は、町へでて、お城には行って行きました。大広間には、もういっぱい人があつまっていました。審判官しんぱんかんはよりかかりのあるいすに、からだをうずめて、ふんわりと鳥のわた毛を入れたまくらを、あたまにかつていました。なにしろこのひとたちは、たくさんにものをかんがえなくてはならないのでしてね。そのとき、お年よりの王さまは立ち上がって、白いハンカチを目におあてになりました。するうち、お姫さまがはいつて来ました。きのうみたよりまた一だん立ちまさってうつくしく、一同にむかつて、にこやかにあいさつしました。でも、ヨハンネスには、わざわざ手をさしのべて、「あら、おはようございます。」といいました。

さて、ヨハンネスがいよいよ、お姫さまのかんがえていること

をあてるだんになりました。まあ、そのとき、お姫さまは、なんという人なつこい目で、ヨハンネスをみたことでしょう。ところが、ヨハンネスの口から、ただひとこと「くつ」とでたとき、お姫さまの顔はさつとかわって、白<sup>はくほく</sup>墨のように白くなりました。そうして、からだじゆう、がたがたふるえていました。けれども、どうにもなりません。みごと、ヨハンネスはいいあてたのですもの。

ほほう、ほほう。お年よりの王さまは、どんなにうれしかったでしょう。あんまりうれしいので、みごとなとんぼをひとつ、王さまはきっておみせになりました。すると、みんなもうれしがつて手をたたいて、王さまと、それから、はじめてみごとにいいあ

てたヨハンネスを、はやし立てました。

旅なかまも、まずうまくいったときいて、ほつとしました。ヨハンネスは、でも、手をあわせて、神さまにお礼をいいました。そして、神さまは、あとの二どもきつと守ってくださいるにちがいないとおもいました。さて、あくる日もつづいてためされることになっていました。

その晩も、ゆうべのようにすぎました。ヨハンネスがねむっているあいだに、旅なかまは、王女のあとについて、山までとぶ道、こんどはむちも二本もちだして来て、まえよりもひどく王女をぶちました。旅なかまはたれにも見られないで、なにかも耳に入れて来ました。王女は、あしたは手袋のことをかんがえるは

ずでしたから、そのとおりをまた、夢にみたようにして、ヨハネスに話しました。ヨハネスはこんどもまちがいなくいいあてたので、お城のなかはよろこびの声があふれました。王さまがはじめしておみせになったように、こんどは御殿じゅうが、そろつてとんぼをきりました。そのなかで王女は、ソファに横になったなり、ただひとことも物をいいませんでした。さて、こうなると、三どめも、みごとヨハネスにいいあてられるかどうか、なにごともしれしだいということになりました。それさえうまくいけば、うつくしいお姫さまをいただいた上、お年よりの王さまのおなくなりなつたあとは、そっくり王国をゆずられることになるのです。そのかわり、やりそこなうと、いのちをとられたうえ、魔法つか

いが、きれいな青い目だまをぺろりとたべてしまおうでしょう。

その晩も、ヨハンネスは、はやくから寢床にはいつて、晩のお祈をあげて、それですつかり安心してねむりました。ところが、旅なかまは、ねむるところではありません。れいのつばさをせなかにいわいつけて、劔を腰につるして、むちも三本ともからだにつけて、それから、お城へとんでいきました。

そとは、目も鼻もわからないやみ夜でした。おまけにひどいあらしで、屋根の石かわらはけしとぶし、女王の遊園ゆうえんのがい骨のぶら下がっている木も、風であしのようになくなにまがりました。もうしきりなしいなびかり稲光がして、かみなりがごろごろ、ひと晩じゆうやめないつもりらしく、鳴りつづけました。やがて、窓

がぱあつとあいて、王女は、とびだしました。その顔は「死」のように青ざめていましたが、このひどいお天気を、それでもまだ荒れかたが足りないといいたそうにしていました。王女の白マントは風にあおられて、空のなかを舞いながら、大きな舟の帆のように、くるりくるりまくれ上がりました。ところで、旅なかまは、れいの三本のむちで、びしびしと、それこそ地びたにぼたりぼたり、血のしずくがしたたりおちるほどぶちましたから、もうあぶなく途中でとべなくなるところでした。でもどうにかこうにか、山までたどりつきました。

「どうもひどいあられでしたの。」と、王女はいいました。「こんなおてんきにそとへでたのははじめて。」

「その代り、こんどは、よすぎてこまることもあるさ。」と、魔法つかいはいいました。

王女はそのとき、二どまでうまくいいあてられたことを話して、あしたまたうまくやられて、いよいよヨハンネスが勝ちときまると、もう二度と山へは来られないし、魔法もつかえなくなるというので、すっかりしよげかえっていました。

「こんどこそはあたらないよ。」と、魔法つかいはいいました。

「なにかその男のとてもかんがえつかないことをおもいつこう。万一、これがあたるようなら、その男はわしよりずっとえらい魔法つかいにちがいなかるう。だが、まあ愉快にやろうよ。」

そういって、魔法つかいは、王女の両手をとって、ちようどそ



のへやにいた小鬼や鬼火などと輪をつくって、いっしよにおどりました。すると、壁の赤ぐもまでが、上へ下へとおもしろそうにとびまわって、それはまるで火花が火の子をとばしているようにみえました。ふくろうは太鼓をたたくし、こおろぎは口ぶえをふく、黒きりぎりすは、ハーモニカをならしました。どうしてなかなかにぎやかな舞踏会ぶとうかいでした。

みんなが、たつぷりおどりぬいてしまうと、王女は、もうこちらでかえりましょう、お城が大きわぎになるからといいました。そこで、魔法つかいは、せめて途中までいっしよにいられるように、そこまで送っていくといいました。

そこで、ふたりは、ひゆうひゆう、ひどいあらしのふくなかへ

とびだした。旅なかまは、ここぞと三本のむちで、ふたりのせなかもくだけよとばかり、したたかぶちのめしました。さすがの魔法つかいも、これほどはげしいあられ空に、そとへでたのははじめででした。さて、お城ちかくまで来たとき、いよいよわかれぎわに、魔法つかいは王女の耳のはたに口を寄せて、

「わしのあたまをかんがえてこらん。」といいました。けれども、旅なかまは、それすらのこらず耳にしまい込んでしまいました。そうして、王女が窓からすべりこむ、魔法つかいが引つかえそうとするとたん、ぎゅつと魔法つかいのながい黒ひげをつかむがはやいか、劔をひきぬいて、そのにくらしい顔をした首を、肩のつけ根からすばりと切りおとしました。まるで、相手にこちらの顔

をみるすきさえあたえなかつたのです。さて、その首のないむくろは、みずうみの魚に投げてやりましたが、首だけは、水でよくあらつて、絹のハンケチにしっかりとくるんで、宿までかかえて、もつてかえつて、ゆつくり床とこに休んで寝ました。

そのあくる朝、旅なかまは、ヨハンネスに、ハンケチの包をさずけて、王女が、いよいよじぶんのかんがえているものはなにかといつて問いかけるまで、けつして、むすび目をほどいてはいけないといいました。

お城の大広間には、ぎつしり人がつまつて、それはまるで、だ  
いこんをいっしょにして、たばにくくつたようでした。評定ひょうじょう

官かんは、れいのおおりの、ながながといすによりかかつて、やわら

かなまくらをあたまにあてがっていました。老王さまは、すつかり、あたらしいお召ものに着かえて、金のかんむりもしやくも、ぴかぴかみがき立てて、いかめしいごようすでした。それにひきかえ、お姫さまのほうは、もうひどく青い顔をして、おとむらいにでもいくような、黒づくめの服でした。

「なにを、わたしはかんがえていますか。」

王女は、ヨハンネスにたずねました。

すぐ、ヨハンネスは、ハンケチのむすび目をほどきました。すると、いきなり、魔法つかいの首が、目にはいったので、たれよりもまずじぶんがぎよつとしました。あんまり、すごいものをみせられて、みんなもがたがたふるえだしました。そのなかで、王

女はひとり、石像のようにじいんとすわり込んだなり、ひとこともものがいえませんでした。それでも、やつと立ち上がって、ヨハンネスに手をさしのべました。なにしろ、みごとにいいあてられてしまったのです。王女は、もう、たれの顔をみようともしないで、大きなため息ばかりついていました。

「さあ、あなたは、わたしの夫おつとです。今晚、式をあげましょう。」  
「そうしてくれると、わしもうれしい。」と、お年よりの王さまはいいました。「ぜひ、そういうことにしよう。」

みんなは、万歳をとなえました。近衛このえの兵隊は、音楽をやって、町じゅうねりあるきました。お寺の鐘は鳴りだしますし、お菓子屋のおかみさんたちは、お砂糖人形の黒い喪ものリボンをどけまし

た。どこにもここにも、たいへんなよろこびが、大水のようにあふれました。三頭の牛のおなかに、小がもやにわとりをつめたまま、丸焼にしたものを、市場のまん中にもちだして、たれでも、ひと切れずつ、切ってとっていけるようにしました。噴水からはとびきり上等のぶどう酒がふきだしていました。パン屋で一シリングの堅パンひとつ買うと、大きなビスケットを六つ、しかも乾<sup>ほし</sup>ぶどうのはいったのを、お景<sup>けいぶつ</sup>物にくれました。

晩になると、町じゆうあかりがつかしました。兵隊はどんどん祝砲を放しますし、男の子たちはかんしやく玉をばんばんいわせました。お城では、のんだり、たべたり、祝杯をぶつけあつたり、はねまわったり、紳士も、うつくしい令嬢たちも、組になって、



ダンスをして、そのうたう歌が遠方まできこえて来ました。

ダンス輪おどり大すきな

みんなきれいなむすめたち、

まわるよまわるよ糸車。

くるりくるりと踊り子むすめ、

おどれよ、はねろよ、いつまでも、

くつのかかとのぬけるまで。

さて、ご婚礼はすませたものの、お姫さまは、まだ、もとの魔法つかいのままでしたから、ヨハンネスをまるでなんともおもつ



ていませんでした。そこで、旅なかまは心配して、れいのはくち  
よしのつばさから三本のはねをぬきとって、それと、ほんのちよ  
つぴり、くすりの水を入れた小びんをヨハンネスにさずけました。  
そうして、おしえていうのには、水をいっぱいみたした大きなた  
らいを、お姫さまの寝台のまえにおく、お姫さまが、知らずに寝  
台へ上がるところを、うしろからちよいと突けばお姫さまは水の  
なかにおちる。たらいの水には、前もって、三本の羽をうかして、  
くすりの水を二、三滴たらしめておいて、その水に三どまで、お姫  
さまをつけて、さて、引き上げると、魔法の力がきれいにはなれ  
て、それからは、ヨハンネスをだいじにおもうようになるだろう  
というのです。

ヨハンネスは、おしえられたとおりにしました。王女は水に落ちたとき、きやつとたかいさげび声を立てたとおもうと、ほのおのような目をした、大きな、黒いはくちようになつて、おさえられてゐる手の下で、ばさばさやりました。二どめに、水からでてくると、黒いはくちようはもう白くなつていて、首のまわりに、黒い輪が、二つ三つのこつてゐるだけでした。ヨハンネスは、心をこめて神さまにお祈をささげながら、三ど、はくちように水をあびせました。そのとたん、はくちようはうつくしいお姫さまにかわりました。お姫さまは、まえよりもなおなおうつくしくなつて、きれいな目にいっぱい涙をうかべながら、魔法をといてくれたお礼をのべました。

その次の朝、老王さまは、御殿じゆうの役人のこらざるをひきつれて出ておいでになりました。そこで、お祝をいいにくるひとたち、その日はおそくまで、あとからあとからつづきました。いちばんおしまいに来たのは、旅なかまでしたが、もうすっかり旅じたくで、つえをついて、はいのうをしょっていました。ヨハンネスは、その顔を見ると、なんどもなんどもほおずりして、もうどうか旅なんかしないで、このままここにいてください。こんなしあわせな身分になったのも、もとはみんなあなたのおかげなのだからといいました。けれども、旅なかまは、かぶりをふつても、あくまでやさしい、人なつこいちようしいいました。

「いいや、いいや、わたしのかえっていく時が来たのだ。わたし

はほんの借をかえしただけだ。きみはおぼえていますか、いつかわるものどものためにひどいはずかしめを受けようとした死人のことを。あのとききみは、持っていたもののこらず、わるものどもにやって、その死人をしずかに墓のなかに休ませてくれましたね。その死人が、わたしなのですよ。」

こういうがはやいか、旅なかまの姿は消えました。

さて、ご婚礼のおいわいは、まるひと月もつづきました。ヨハネスと王女とは、もうおたがいに、心のそこから好きあつていました。老王さまは、もう毎日、たのしい日を送っておいになりました。かわいらしいお孫さんたちを、かわるがわるおひぎの上にのせて、かつてにはねまわらせたり、しやくをおもちやにし

てあそばせたりなさいました。ヨハネスはかわりに、王さまになつて、王国のこら<sup>ず</sup>おさめることになりました。









# 青空文庫情報

底本：「新訳アンデルセン童話集第一巻」同和春秋社

1955（昭和30）年7月20日初版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

※底本中、\*で示された語句の訳註は、当該語句のあるページの下部に挿入されていますが、このファイルでは当該語句のある段落のあとに、5字下げで挿入しました。

入力：大久保ゆう

校正：秋鹿

2006年1月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 旅なかま

## REJSEKAMMERATEN

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 ハンス・クリスティアン・アンデルセン Hans Christian Andersen

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

#### Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>